

歴史探訪 Part II - ⑩

江戸川木材工業株式会社

顧問 清水 太郎

前回に引き続き、鉄道唱歌 35 - 66 番を唄いながら名古屋 - 神戸まで探訪します。

- ③⑤父やしなひし養老の 滝は今なほ大垣を 三里へだてて流れたり 孝子の名誉ともろともに
- ③⑥天下の旗は徳川に 帰せしいくさの関ヶ原 草むす屍^{かばね}いまもなほ 吹くか胆吹^{いぶき}の山おろし
- ③⑦山はうしろに立ち去りて 前に来るは琵琶の海 ほとりに沿ひし米原は 北陸道の分岐点
- ③⑧彦根に立てる井伊の城 草津にひさぐ姥ヶ餅 かはる名所も名物も 旅の徒然^{とぜん}のうさはらし
- ③⑨いよいよ近く馴れくるは 近江の海の波のいろ その八景も居ながらに 見てゆく旅の楽しさよ
- ④⑩瀬田の長橋横に見て ゆけば石山観世音 紫式部が筆のあと のこすはここよ月の夜に
- ④⑪粟津の松にこととへば 答えがほなる風の音 朝日將軍義仲の ほろびし深田は何かたぞ
- ④⑫比良の高嶺は雪ならで 花なす雲にかくれたり 矢走にいそぐ舟の帆も みえてにぎはふ波の上
- ④⑬堅田におつる雁がねの たえまにひびく三井の鐘 夕ぐれさむき唐橋の 松には雨のかかるらん
- ④⑭むかしながらの山ざくら にほふところの志賀の里 都のあとは知らねども 逢坂山はそのままだ
- ④⑮大石良雄が山科の その隠家はあともなし 赤き鳥居の神さびて 立つは伏見の稲荷山
- ④⑯東寺の塔を左にて とまれば七條ステーション 京都京都とよびたつる 駅夫のこゑも勇ましや
- ④⑰ここは桓武のみかどより 千有余年の都の地 今も雲井の空たかく あふぐ清涼紫宸殿
- ④⑱東に立てる東山 西に聳ゆる嵐山 かれとこれとの麓ゆく 水は賀茂川桂川
- ④⑲祇園清水智恩院 吉田黒谷真如堂 ながれも清き水上に 君がよまもる加茂の宮
- ⑤⑩夏は納涼の四条橋 冬は雪見の銀閣寺 桜は春の嵯峨御室 紅葉は秋の高雄山
- ⑤⑪琵琶湖を引きて通したる 疎水の工事は南禅寺 岩切り抜きて舟をやる 知識の進歩も見られたり
- ⑤⑫神社仏閣山水の 外に京都の物産は 西陣織の綾錦 友禅染の花もみぢ
- ⑤⑬扇おしろい京都紅 また加茂川の鷺しらず みやげを提げていざ立たん あとに名残は残れども
- ⑤⑭山崎おりて淀川を わたる向うは男山 行幸ありし先帝の かしこきあとも忍ばるる
- ⑤⑮淀の川舟さをさして くだりし旅はむかしにて またたくひまに今はゆく 煙たえせぬ陸^{くが}の道
- ⑤⑯おくり迎ふる程もなく 茨木吹田うちすぎて はや大阪につきにけり 梅田は我をむかへたり
- ⑤⑰三府の一に位して 商業繁華の大阪市 豊大閣のきづきたる 城に師国はおかれたり
- ⑤⑱ここぞ昔の難破の津 ここぞ高津の宮のあと 安治川口に入る舟の 煙は日夜たえまなし
- ⑤⑲鳥も翔らぬ大空に かつむ五重の塔の影 仏法最初の寺と聞く 四天王寺はあれかとよ
- ⑥⑩大阪いでて右左 菜種ならざる畑もなし 神崎川のながれのみ 浅黄にゆくぞ美しき
- ⑥⑪神崎よりはのりかへて ゆあみにのぼる有馬山 池田伊丹と名にききし 酒の産地もとほるなり
- ⑥⑫神戸は五港の一つにて あつまる汽船のかずかずは 亜米利加露西亞支那印度 瀬戸内がよひも交じりたり
- ⑥⑬礎にはながめ晴れわたる 和田のみさきを控えつつ 山には絶えず布引の 滝見に人ものぼりゆく

- ⑥4七度うまれて君が代を まもるといひし楠公の いしぶみ高き湊川 ながれて世々の人ぞ知る
 ⑥5おもへば夢か時のまに 五十三次はしりきて 神戸のやどに身をおくも 人に翼の汽車の恩
 ⑥6明けなば更に乗りかへて 山陽道を進ままし 天気は明日も望あり 柳にかすむ月の影

江戸時代の旅人は、熱田神社の脇にある湊から、帆船に乗って、桑名まで七里の渡しを往きました。海が荒れている日や、船に弱い客向けには、せやの道という陸路もありました。

文明開化の世になって、東海道線を行く汽車は、名古屋－枇杷島－稲沢－尾張－一宮－木曾川－岐阜－大垣と、乗り継いで養老の滝の故事を懐しみ、天下分け目の関ヶ原を走ります。

私が中山道中で行ったときは、たまたま9月15日、合戦のあった日でありました。

駅前には2振のテントがあり、「合戦の跡地巡り、さわやかウォーク」と銘打ってイベントの最中でした。いくら500年前とは云え、何万という兵士が亡くなった跡を歩いて、さわやかはないだろう、と思っておりましたが、鉄道唱歌⑥6には、「いまもなほ 吹くか胆吹の山おろし」と死者の霊を慰さめる歌詞を見て救われた気持ちになりました。

⑥7に「米原は北陸道の分岐点」と謳われておりますが、私が歩いた中山道は、米原、彦根の先鳥居本で琵琶湖に出会います。

旧東海道線は長沢で船に乗り換え、大津まで優雅な旅となります。

⑥9－⑥43まで近江八景が謳われております。

広辞苑を繙きますと「中国の瀟湘八景しょうしやうに擬して琵琶湖の南部にある八勝景が定められてました。」歌川広重もここで八景を描いた浮世絵を残しました。

八景とは

①比良の暮雪 ②矢橋の帰帆 ③石山の秋月 ④瀬田の夕照 ⑤三井の晩鐘 ⑥堅田の落雁 ⑦粟津の晴嵐 ⑧唐崎の夜雨 であります。

⑥40の石山観世音で紫式部は『源氏物語』を執筆しました。⑥41には粟津の晴嵐が出て参ります。近くの義仲寺には木曾義仲と並んで芭蕉の「旅に病んで夢は枯野をかけめぐる」の辞世の句碑があります。⑥42に矢橋の帰帆 ⑥43に堅田の落雁 三井の晩鐘 唐崎の夜雨 が謳われて居ります。⑥44志賀の里を越えますと、逢坂の関があり、百人一首 蟬丸の「これやこの行くも帰るも別れては知るも知らぬも逢坂の関」や、清少納言の「夜をこめて鳥のそらねははかるともよに逢坂の関はゆるさじ」と謳われるほどの名所を越え、⑥45大石良雄の隠れ家山科、⑥46東寺の塔を左に見て京都駅に着きます。

⑥47～⑥53までは京都の名所旧跡のオンパレードで、紫宸殿、山紫水明の東山、山嵐、賀茂川桂川、神社仏閣は祇園、清水寺、智恩院、夏の四条橋、冬の銀閣寺、春の嵯峨御室、秋の高雄山と、贅を尽した京都絵巻を見る思いがいたします。⑥52～⑥53は京都物産の西陣織、友禅染や土産の名菓が謳われております。⑥53南禅寺の境内には煉瓦を積んで、琵琶湖の水を京都に送る疎水の工事が完成し、素晴らしい技術進歩の跡がみられます。

東海道線開通前は、山崎から船便で淀川を下っておりましたが、新たに、京都－西大路－桂川－向田町－長岡京－山崎－島本－高槻－富田－茨木－千里丘－吹田－新大阪－大阪となっております。鉄道唱歌では、茨木、吹田、大阪と、舟運に替って陸路の鉄道が開通した経緯を伺い知ることが出来ます。

⑤に淀川の舟運に替えて便利な経路を得た喜びが謳われております。

大阪湾は淀川から運ばれた土砂が堆積し、大型船が接岸する為に、大規模な浚渫工事を要しました。神戸は自然に恵まれていて、多くの船舶が海外から来ても接岸し易い条件が揃っており、平安時代に清盛が整備して中国との貿易にも対処できるようにした為、今では国際的な良港となっております。

⑥①にある神崎は今の尼崎辺りと思われます。ここから乗り換えて、有馬温泉に行く経路があり、池田、伊丹と酒の産地も通り、又日本海の舞鶴まで行く道も開けました。

④には七度生まれて国を守ると誓った楠正成公の石碑がある湊川を渡り、東海道線は神戸に到着します。



神戸駅

明治22年神戸—東京間の開通を記念して改装した煉瓦造り、2階建ての2代目神戸駅で、豪華な貴賓室や食堂もあり、乗客と貨物の取り扱い場所を別にした本格的な駅舎である。神戸駅前には電車線路もみられる。

出典：<https://kstylek.exblog.jp/2253130/>